

社団法人日本心理学会研究集会等助成金成果報告書

<p>代表者氏名 (ふりがな)</p>	<p>松尾太加志 (まつお たかし)</p>	<p>所属</p>	<p>北九州市立大学文学部 教授</p>
<p>研究集会等名称</p>	<p>1. 社団法人日本心理学会「医療安全の心理学研究会」 ワークショップ 医療事故防止に心理学はどのように貢献できるか～オMISSIONエラーを防止する～ 2. 社団法人日本心理学会「医療安全の心理学研究会」 研究会</p>		
<p>成果概要</p>	<p>1. ワークショップ 開催日時 2009年8月28日 15-17時 場所 日本心理学会大会会場 1) 参加人数 日本心理学会参加者 名〔会員 人(うち認定心理士1人) 非会員 16人〕 2) 集会等の目的・成果等 松尾太加志(北九州市立大学)より、「ヒューマンエラー防止の外的手掛かりも出る～omission errorをどうとらえる」と題して、外的手がかりモデルの紹介と本ワークショップの検討ポイントの説明が行われた。次に、佐野幸弘氏(味の素株式会社)より、医療現場で起こりがちな輸液バックの隔壁開通忘れの防止対策をとった製品の開発の実際について紹介をいただいた。城尾裕子氏(北九州市立大学)より患者が実施している薬の飲み忘れ対策についての調査結果を紹介いただいた。以上の心理学研究者と医薬品メーカーからの話題提供のあと、箱田裕司氏(九州大学)から話題提供者への質問をいただき、またエモーショナルなストレスがかかったときのエラー発生しやすさなどについてコメントをいただいた。医療現場における「オMISSIONエラー」の防止に心理学の知見がどのように活かせるかをフロアを交えて議論した。</p> <p>2. 研究会 開催日時 2009年8月27日 18-20時半 場所 ハートピア京都第5会議室 1) 参加人数 会員 10名(うち認定心理士1名) 非会員 名(うち認定心理士 0名) 2) 集会等の目的・成果等 中原り子氏(東邦大学医学部看護学科)より、「危険知覚と危険予知に及ぼす経験の影響～看護学生と看護師の眼球運動分析とプロトコル分析の比較から」と題して、看護学生7名と看護師9名が独自開発した危険予知訓練用の動画教材を見る際のアイマークカメラによる眼球運動の分析とプロトコル分析をもとに両群の危険予知の特徴を比較した実験研究の結果を発表いただいた。その後、参加者間で討議を行なった。 ワークショップと研究会を通し、心理学の視点や研究方法が、多くの医療現場に共通する医療安全の課題の改善や解決に有用であることがあらためて確認された。</p>		